The Old Man and the Sea におけるHemingwayの人生論

浅　野　豊　子

I　自然と老人

The Old Man and the Sea は，海を舞台に，老人と自然との暖かい触合いを描いた作品である。老人は漁夫として，常に自然と接して生きてきた人間で，自然を心から愛し，悲しみも喜びも共にしてきた。自然もそれに答えるかのように，この両者は何か眼に見えない絆でしっかりと結ばれている。作品中には様々な自然物が登場するが，どれ1つを取上げてみても，彼にとっては重要な意味を持ち，彼はそれらを人間と対等に考え，人間と同じ次元で捕えている。

老人は大海原に小舟を浮べ，魚を求めて唯1人どこまでも漂っていく。その姿は孤独だ。だが，彼自身はそう感じてはいない。なぜなら，自分が心から愛し，信頼しているところの暖かな海の懐に抱かれ，また，種々な海の生物や太陽，月，星など，希望や慰めを与えてくれるものが周囲に存在するからである。それらのものが，彼をやさしく迎え入れてくれるというのは，取りも直さず，老人自身が自然に対して抱いている心情の反映である。そして，それらとの結びつきには，誇張や意図的なものは全く感じられず，極めて自然な印象が残る。彼にとって，自然とは，人間に敵対するというよりも，むしろ人間に恵みを与えるものである。それは全編を通して感じられることであるが，特に海に例を取ってみると，彼の心情がはっきりと読みとれる。

He always thought of the sea as lar man which is what

people call her in Spanish when they love her. Sometimes those who love her say bad things of her but they are always said as though she were a woman. …… the old man always thought of her as feminine and as something that gave or withheld great favours, and if she did wild or wicked things it was because she could not help them. The moon affects her as it does a woman, he thought.

このように，老人と自然との関係は，信頼と調和に尽きると言ってもよい。後に，彼の前に〝敵〟が現われる。それは偉大な力を備えた大魚であるが，決して自分のペースを乱すことなく，老人の小舟を2日2晩もの間曳いて泳ぎ続ける。老人も自分のあらゆる経験を生かし，手段を尽してそれと戦い，なんとしてでもしとめたいと思う。しかしながら，こうした過程にあって，彼は大魚に対して〝敵〟を感ずるばかりではなく，〝友〟をも感ずるのである。これは一見矛盾のようだが，矛盾だとは考えさせないものがそこにある。それは，1つには，大魚が高貴とも言える程の態度で彼に望み，そこに彼が英雄的精神と行動を汲取っている為であろうが，もっと根本的に言えば，老人と自然というものの結びつきがそれを支えているように思える。

ところで，自然と老人とのこうした結びつき，それはどこから生まれてきたものなのだろうか。第1には，老人に生まれながらにして与えられた，漁師としての境遇が考えられる。それは彼にとって，変えようとして変えられるものではなかったかもしれない。そうした事は別としても，彼は海という自然の中ではぐくまれ，そこに自分の生活を見出して生きてきた人間である。そして少なくとも，彼はその境遇の中で精一杯生きようと努めてきたはずだ。彼が自然をこの上なく愛するのは，そうした彼の生いたちが築き上げていった彼の本性，つまり，彼の血が必然的にそうさせるのだと言えるだろう。彼は海から日々の糧を得ている。しかし，海を単なる生活の為の闘争の場とは考えていない。海は彼にとっ

てやさしく，暖かい存在だ。だが，それは一瞬のうちに，厳しい状況に彼を立たせることもしばしばある。彼に試練を与えるが如く，いくつもの難題をつきつけてくるのだ。海の持つそうした力，強さ，恐しさ，それらを老人は十分に承知している。その上で，彼は自然のそうしたものを常にあるがままに受止め，認容してきた。老人と自然との関係は，こうした要素を持っている。しかし、それはむしろ，それらをすべて超越した次元で結合されたものなのだと言った方が適当なのかもしれない。

老人と自然との結びつきを考える上で，もう1つ忘れてはならない重要な要素がある。それは，作者 Hemingway 自身の自然感だ。彼は幼小の頃から自然に親しむ機会に恵まれていた。自然愛好は初期開拓者以来の Hemingway 家の血の中に生き続けてきたものであり，彼は父親や父方の祖母から，自然について学ぶところが多かった。また，彼の両親が1898年にミシガン州の Walloon Lake に別荘を購入したことによって，さらに自然と身近に接するチャンスが与えられた。彼はここで様々な自然物に親しみ，そこでの生活に心からの安らぎと喜びを見出していた。こうした，幼児の時から自然に親しむ機会を得られたことは，彼にとって意義深いことであり，貴重な体験となって，後までも大きく影響を及ぼしていくことになる。成人してからの Hemingway の自然愛好というものは，すべて激しい肉体的行動を伴うものであったが，それらを通して自然を見つめ，自然を探索し続けてきたと言えるだろう。自然は自分に無限の可能性を追究させるものであり，試練に耐えさせる強靱な忍耐力を養わせるものだと彼は感じていたに違いない。

こうした Hemingway の心情が余す所なく描かれているのが *The Old Man and the Sea* である。自然の持つ強さ，偉大さと共に，自然の持つ慈愛のようなものを敏感に感じ取り，見極めたのがこの作品である。登場人物である1人の老人，そこに作者 Hemingway は自分自身を投影させていたのではないだろうか。

II　文明と老人

老人と自然との間には，高い次元での調和と融合が見られ，彼はいうなれば自然人であると言ってもさしつかえない。だが，彼も現代社会に生きる人間である以上，文明とも接しているわけである。自然と文明，それは相対するものであるが，自然人である老人の文明への対処の仕方とはどのようなものであろうか。

老人は，確かに文明的な人間ではない。彼の生活を子細に眺めた時，そこに文明に浴していると思われるものは極めて少ないように思われる。しかし，次の引用を見てみよう。

「彼は〝飛行機〟や〝モーターボート〟などにも凶兆を感じないばかりか，それらにある種の好奇心を感じさえするのである。彼はまた，〝文明〟のひとつの象徴である〝金〟に対しても，それ程潔癖ではない。『この巨大なマーリンから，何人分の食糧が得られるだろうか』と考え，『3分の2料理して，1ポンド30セントとすると，いくらになるかな』と思う。いや，そう言いただせば，彼はこの魚を釣り上げるのにも，きわめて職業的で，正確だ。彼は一面徹底したリアリストであり，決して潔癖な〝文明〟拒否者などではない。」(2)

このように大橋健三郎は述べている。さらに付け加えるなら，老人は野球にも興味を示しているし，新聞も読む。老人は文明とはかけ離れた人間であるかに見えるが，1つ1つ細かく考えていくと，彼も社会生活を営んでいる以上，何らかの形で文明と結びついているし，また，彼自身もそれを否定しようとはしていないことがわかる。が，今述べたことは，彼の文明との表面的な関係にすぎない。もう少し本質を探ってみよう。

「他面の彼は呆然たる夢想家だ。……よく考えてみれば，この作品は，その大部分が老人の夢想からできあがっているのだ。もちろんここには，極めて具体的でリアリスチックな魚釣りのディーテイルがある。だが，根本的には，ここには現実と夢想の緊張した相剋があるのであり，

しかもその緊張関係は，前者によって後者が律せられるよりは，より多く後者が前者を逸脱することによって，破られがちなのである。そして，彼老人が最後に〝ライオンの夢〟を見る時には，彼の心は完全に現実の世界を，したがってまた〝文明〟の世界を逸脱してしまっている。ことに〝観光客〟たちと老人の夢との鮮やかな対比は，一面アイロニックでもあり，一面悲壮でもある。なぜなら，これは，ある意味では，〝文明〟の拒否とは言わぬまでも，少なくとも〝文明〟の無視であると同時に，老人の心とその世界の，現実の世界における敗北と，〝文明〟の世界からの疎外を意味しているからだ。確かに老人は，何物かに追いつめられている。そして，ここには〝ライオンの夢〟と〝観光客〟の鮮やかな対比がある以上，老人を追いつめているものは，やはり，ひろくいって，〝文明〟の世界と考えていいのではなかろうか[(3)]」

老人は現実の世界に生きていながら，常に彼の関心はそこから逸脱し，超現実の世界に向けられている。老人の本当に生きるべき所，やはりそれは自然の中でしかありえないのだろうか。

老人と文明について，もう少し別の角度から眺めてみたい。それは，今、老人と文明との関連について述べてきたが，老人自身は，文明をどのようなものだと考えていたのだろうかという事である。この作品を眺めた時，老人は，文明というものについて，それがどうあるべきものだとか，自分がどのような関連を持っているのだとか，あるいは，そこでの自分の対処の仕方等について，自分の意見を語ってはいない。そこで，先の引用文からも言えることであるが，この作品では，老人そのものに文明について語らせるのではなく，彼を１つの足がかりとして文明をとらえ，その批判を行なおうとしているように思える。

文明というものは，我々に様々な恩恵をもたらしてくれる。多方面の分野に渡って，人間生活を豊かにし，また，機能的かつ円滑にしてくれるものだと言えるだろう。だが，裏面から捕えてみると，それは，人間をメカニカルで画一的な組織の中に没入させ，その結果，本来人間が持っている独自性を失わせ，均一化させてしまう危険性をも伴っている。さ

らにそれが高じてくると，人間性の無視にもつながっていく。

Hemingway は，自然を愛好すると共に，人間社会の有様にも大きな関心を寄せていた。しかし，それは人間の本来の姿が見出せるところにであり，従って，彼の心をいつも支配していたものは，原始的な世界，つまり，人間の根元的な純粋さ，素朴さを消失させるという，悪い意味での文明に犯されていない世界であった。彼は自分の理想とすべきものを老人の中に投入し，その姿と一般の文明人と見られる人間とを対比することによって，自分の心に疼いていることを語ろうとしている。

III　大魚との戦いの意味

The Old Man and the Sea の主体を成しているのは，老人と大魚との戦いである。2日2晩もの間，老人は大魚に曳回されたあげく，やっとの思いでそれをしとめる。が，結果的に言えば，それをさんざんに鮫に食い荒されて，彼の苦労は水泡に帰してしまう。しかし，表面的にはそう見えるものも，実は，奥に大きな意味を含んでいるのである。ここに，1つ考えてみたい問題が生じてくる。それは，老人にとって，大魚とはいったい何だったのか，大魚との戦いが彼に何をもたらしたのか，ということだ。

大魚は，初めは老人にとって，単なる敵だった。しかし，それが高貴とも言える程堂々とした態度を示したことから，彼は次第に愛着を覚え，ついには友情や兄弟愛までも感ずるようになる。そして，この交流を通して，彼は様々の事柄について自分自身を分析しながら追究していくことになる。例えば，自分が漁師であるが為に味わわねばならない孤独感について考えたり，あるいは，その考えを否定して，自分は漁師に生まれついていることを再確認し，そうした状況を自分のものとして，あくまで受入れていくべきなのだということを自分に言い聞かせたりする。また，彼は，大魚に向って "I will show him what a man can do and what a man endures."[(4)] と言っているが，それは，魚に人間の威厳を誇示すると同時に，人間にはいったい何ができるのか，人間の耐えていかね

ばならないことは何なのかと，自分自身に逆に問っているのだと考えられないでもない。さらに，生き物を殺すことについて罪の意識を感じ，自問自答を繰り返したりする。これらはすべて，彼が今まで考えてもみなかった事ばかりである。そして，このように彼の精神的な探究は様々な方向に発展していくが，その根底に流れるもの，それは，人間は苦痛の中において，いかに生きるべきかという問題ではないだろうか。このことを考える上で，"grace under pressure" という言葉に注目してみたい。これは作者 Hemingway 自身が，人間の行動を観察し，その1つの到達点として見出したものであるが，老人を表現するのに最適な言葉であると思われる。

大魚との戦いは，肉体と精神，両面において彼を疲れ果てさせ，死の一歩手前にまで追いやった。しかし，こうした中にあっても，彼は，決して，人間としての誇りを失なうことはなかった。それは，魚に対して投げかける言葉，自分自身に対して話しかける言葉の中に顕著であるが，3日間の彼の行動を観察してみると，一貫して彼に備わっていたと考えてもよいようだ。事実，鮫に襲撃され，自分が必死の思いで手に入れた魚を食い荒される憂き目に合った時でさえも，自分の境遇や運命を悲観することなく，今，自分は人間として何をなすべきかを自覚して，最善を尽すべく，それに立向っていくのだ。結局，彼の抵抗は無意味なものに終ってしまう。が，人事をすべて尽してそうなった結果に，何の後悔が残るだろうか。この世の中には，人間の力では簡単に征服し得ないものが多分にある。しかし，大切なことは，そうした困難，険しさの中でいかに振舞うか，ということではないだろうか。老人が大魚を心から愛することができたのも，それが，最後まで正々堂々と，気品を失うことなく彼と戦ったからであり，そこに，自分自身の生き方に通ずるものがあるとまでは気づかないにしても，何かしら，彼の心を豊かに満してくれるものを敏感に感じ取っていた為であろう。"grace under pressure"，この言葉がここに生きてくる。

このように，老人の行動は，"grace under pressure"という言葉によっ

て，一応の枠の中に収めて考えることができる。だが，またこれは，"A man can be destroyed but not defeated."[5] という，老人の1つの悟りを示す言葉とも関連して思い浮かべられるものであろう。なぜなら，老人は，自分，または，人間というものの不屈性に，強い信頼を抱いていたからこそ，困難の中にあっても，気品を失なわずにいられたのだと考えるべきだからである。確かに，老人にも弱さはある。しかし，それを補うに足りる信念を失うことはなかった。もし，彼が自分は全く弱い存在であり，自然の偉大な力の前には，無力に近いのだとあきらめていたなら，これ程雄々しく行動することができただろうか。

"A man can be destroyed but not defeated." ということについて，作者 Hemingway は，この作品を書くにあたって，かなりその点を意識していたらしい。A. E. Hotchner とのある対話の中にこんな箇所がある。

> "There is at the heart of it the oldest double dicho I know."
>
> "What's a double dicho ?"
>
> "It's a saying that makes a statement forward or backward. Now this dicho is : Man can be destroyed but not defeated."
>
> "Man can be defeated but not destroyed."
>
> "Yes, that's its inversion, but I've always preferred to believe that man is undefeated."[6]

これは, Hemingway 自身の, やはり自分に対する絶対の自信から生まれた言葉だと考えてよいと思う。その考えが, *The Old Man and the Sea* の老人にも投影していったのだろう。

老人にとって，大魚とはいったい何だったのか，大魚との戦いが彼に何をもたらしたのかという問題について，以上のように意見を発展させてきたが，これらの中に，何らかの解答を見出したようにも思う。ここで，それを一言でまとめてみるなら，大魚との戦いは，老人に，新しい見地から自己を再確認させると同時に，自分の可能性の限界を試す良い

チャンスを与えたのだと言えるだろう。そして，これを経験したことによって，彼は新しい人生の出発を見るかもしれない，とは考えられないだろうか。

Ⅳ　Hemingway の求めた理想世界

Hemingway は *The Old Man and the Sea* について，"It's as though I had gotten finally what I had been working for all my life."[(7)] と述べている。彼は一生涯，人間の生き方について探索を続けてきた。それは作品の中において，様々な形で表現されているが，そこに１つ共通点が見出せる。

「Hemingway の描く世界の様々な状況，様々な登場人物は，いずれも例外なく絶えず死と隣り合わせて生き，絶えず身に迫る破滅を意識する人間のそれに他ならない。その典型的な状況において，絶望的な危険とそれに対する果敢な闘い，そして，ある瞬間不意にあらわれる death of violence —— Hemingway は，そうした世界にいつもわるびれずに生き続けた。[(8)]」

この引用から知ることができるように，人間を "死" というものと直面させることによって，そこから人間の生き方を捕えようとしている。人間を１つの原点に立返らせる意味で，また，人間の本質を見極める意味で，死と対面させることは効果があるかもしれない。 *The Old Man and the Sea* に描かれた老人も，死と生との瀬戸際の瞬間を体験し，そこにおいて，改めて自分を鋭く見つめ直している。あるいは，彼は極限に立たされて，初めて人間とは何なのか，人間とはどう生きるべきものなのかを，自分自身に問いかけたのだと考えることもできるだろう。

Hemingway は，*The Old Man and the Sea* 以前の作品では，人間を描く場合に，社会の中において捕えようとしていた。しかし，様々な批評家が指摘しているように，そこでは，極め尽した人間の姿を表現することはできなかった。混沌としたものが渦巻く社会においては，彼の求める人間像は，明確には浮び上ってこなかったようだ。*The Old Man*

and the Sea においては，その背景に自然という，純一な世界が設置されている。この背景は，社会というものと比較した時，比べものにならない程単純で，しかも，純粋な領域である。そうした中に1人の人間を登場させ，死と直面するような大きな事件とからみ合わせて，人間の在り方を追究しようとしている。Hemingway にとって，自然とは極めて自分に親しいものであり，常にそこに潤いを求めていた。彼が *The Old Man and the Sea* を描く時，彼の脳裡には，様々な自然物との交りが鮮かに思い浮べられたに違いない。自然とは，人間を素直に，そして純粋にさせるもの，そうした中で生き続けた老人，その中に，人間の本質を彼は初めて捕えることができた。

Hemingway の伝記から探ってみると，彼が老人と自然との関係に，自分自身の自然感を投影させていることは間違いない。その他，作品中の様々な箇所に，彼の行動の反映が見られる。Hemingway は，非常に素朴な〝原始的世界〟を常に求めていた。それは，人間を被っているヴェールを取除き，赤裸々な状態にさせ得る世界である。そこには，醜い争いも，偽善も，わだかまりもない。すべてが透明で，しかも，暖か味にあふれている。Hemingway は，この作品を仕上げた時，自分が生涯求めていた理想境をつかみ得たと確信した。

V 結び

The Old Man and the Sea に対する批評は様々である。しかし，「彼の到達点は，人間を孤立した個人として捕えた上での到達点である。政治には背を向け，社会的展望は一切持込まず，いわば，爽雑物をすべて排除したところに，『老人と海』の純一な世界は築かれたのだ」[(9)]，とする同様な意見が非常に多い。確かに，この作品からは，人間社会に存在する色々な問題は閉め出され，1人の人間にのみスポットが当てられている。その捕え方は，社会という大きな次元から考えるなら，全くミクロ的だと言えるだろう。だが，次のような批評もある。

「老人の大海における絶対的な孤独とそれへの信念ということは，老

人自身の現実社会への無言の，しかも力強い批判を秘めてはいないだろうか。輝かしい魚は，老人の唯一の友であり，兄弟ではあるが，この2つのものは，この大海ではもはや現実社会のものではない。彼らは，現実社会がすでに見失ってしまった何か貴重なものを2人きりで分ち持っているのである。魚の栄光は，孤独な老人の栄光でもあり，また，すでに失われてしまった人間の栄光でもある。結末の，美々しいが無知な都会の観光客と，みすぼらしいが栄光を身をもって知った老人との対照は，そうした無言の力強い批判を裏づけるものとも見られるのだ」[10]

The Old Man and the Sea は，現実社会に胚胎する一切の問題を排除しているかに見えて，実はその中に，社会を語っているというのである。老人は，超現実の世界に生きる人間であり，そこにおいてのみ勝利を得ることのできる人間である。が，この作品を深く探る時，その根底をなすものとして，あるいは作品が描かれた動機として，やはり現実社会を念頭に置く必要があると思われる。

Hemingway は常に現実の社会を自分の眼で見，肌でそれを味わってきた人間である。彼が現実を知れば知る程，それは複雑で，矛盾に満ち，しかも，つかみどころのない程混沌としたものであることがわかってくる。だからこそ，自然という純粋無垢な世界を背景に，現実の社会ではもはや果し得ないこと，つまり，人間の本当の素朴さ，高貴さを取戻すこと，そうしたものを求め，実現すべく，*The Old Man and the Sea* を描いたのだと言えるだろう。

〔註〕

(1) Ernest Hemingway *The Old Man and the Sea* pp. 23～24, Penguin Books, 1968.

(2) 大橋健三郎「荒野と文明」pp. 40～41，研究社，1966.

(3) Ibid., pp. 41～42

(4) Ernest Hemingway *The Old Man and the Sea* p. 57, Penguin

Books, 1968.

(5) Ibid., p. 93

(6) A. E. Hotchner *Papa Hemingway* p. 73, Random House, Inc., 1966.

(7) 野崎孝 *Ernest Hemingway,* "テーマと研究Ⅳ" p. 73, 研究社, 1965.

(8) 中田耕治 「ヘミングウェイの死について」

A. E. Hotchner, 「パパ・ヘミングウェイ」 (中田耕治訳) pp. 305～306, 早川書房, 1967.

(9) 野崎孝 *Ernest Hemingway,* "テーマと研究Ⅳ" p. 73, 研究社, 1965.

(10) 大橋健三郎 解説 4 「老人と海」 世界文学全集 II—18 p. 不明 河出書房新社, 1963.